連載コラム

みずき野と
その周辺の
植物と昆虫

第35回
水田と湿地の植物（1）～ オモダカ、コナギなど ～

本吉 總男（もとよし ふさお）　2017 年 8 月

みずき野郵便局前の十字路から北に10分ほど歩くと、小貝排水路にかかる市之台橋(いちのだいはし)があります。この橋の上からは、取手市市之台(いちのだい)・貝塚(かいづか)、上高井(かみたかい)、下高井(しもたかい)地区、また、守谷市本町(ほんちょう)、同地(どうち)、赤法花(あかぼっけ)地区に広がる水田地帯を見渡すことができます。水田や休耕田の中や水田に沿う農道のへり、畔(あぜ)にはそのような環境に適した植物が多く見られます。

取手方面

守谷方面

市之台橋から水田を眺める　7月下旬

また、みずき野周辺には湿地が多くあります。水田はよく管理されているので、水田では目の敵にされる植物でも湿地ではよく繁殖しています。

水田やその近く、あるいは湿地によく見られる植物について、2回に分けて紹介します。

1　イボクサ

イボクサは水田や湿地によく群生するツユクサ科の植物で、北海道を除く日本列島と東アジアに分布しています。高さは20～40センチ程度で、あまり目立ちませんが、水田では強力な雑草です。花は小さいのですが、近寄って見るときれいです。みずき野近くでは、休耕田や水田のへりに群生しています。

イボクサ　7月下旬　市之台地区

イボクサは「疣(いぼ)草」の意で、別名はイボトリグサ。この植物の汁をいぼに付けるといぼが取れるという意味ですが、本当にいぼが取れるかどうかはわかりません。

2　コバギボウシ

ギボウシという名は、オオバギボウシ、コバギボウシ、スジギボウシなど、約40種のギボウシの仲間（キジカクシ科ギボウシ属）の総称です。

みずき野周辺の湿地に見られるのはコバギボウシで、花は7～9月頃まで咲いています。地味な植物が多い湿地には、群がり咲く薄紅色の花がよく目立ちます。

コバギボウシ　9月上旬　貝塚地区

コバギボウシの葉

湿地より水気の少ない草原に生えるオオバギボウシは、関東地方に多いギボウシですが、みずき野周辺ではまだ見たことがありません。コバギボウシのような楚々(そそ)とした姿と異なり、オオバギボウシはがっしりした姿です。

ギボウシは、「擬宝珠」と書きます。擬宝珠とは橋や建物の欄干(らんかん)に付ける宝珠の飾りで、ネギ坊主のような形をしたものです。植物のギボウシをなぜ擬宝珠になぞらえたのか、はっきりしません。擬宝珠につぼみの形が似ているからとか、茎の先端につくられた若い花の房が似ているからとかいう説もあります。でも私には、オオバギボウシの葉が擬宝珠の形に似ているような気がします。

3　タコノアシ

タコノアシは本州、四国、九州および朝鮮半島、中国に分布するタコノアシ科の植物で休耕田や湿地に生える多年草です。茎の高さは50～70センチほど。8月頃に茎の先が枝分かれして、多数の小さな白い花を咲かせます。9月下旬～10月頃、植物全体が赤褐色になり、茎の先はまさにゆでだこの足を連想させるような姿になります。

タコノアシの花　8月上旬
第2調整池北隣接地

赤くなったタコノアシ　9月下旬
第2調整池北隣接地

数年前までみずき野周辺にもよく見られた植物ですが、最近はあまり見なくなりました。環境省では、タコノアシを準絶滅危惧種に指定しています。

4　ヌマトラノオ

ヌマトラノオは湿地に生えるサクラソウ科の多年草。北海道を除く日本列島と中国およびインドに分布しています。7～8月頃、白い花が房状に咲く美しい植物です。みずき野周辺の湿地にもよく見られます。

ヌマトラノオによく似た植物にオカトラノオがあります。オカトラノオは湿地よりも乾いた場所に生えること、ヌマトラノオは花の房が直立するのに対し、オカトラノオは房の先が下を向くことで、両種の識別は容易です。参考のため、オカトラノオの写真も載せておきます。

ヌマトラノオ　7月下旬
さくらの杜公園東隣接地

（参考：湿地の植物ではない）
オカトラノオ　6月中旬　城趾公園

5　アカバナ、チョウジタデ、ヒレタゴボウ

アカバナとチョウジタデ、ヒレタゴボウは、湿地や水田を好むアカバナ科の植物です。

アカバナは水田より湿地に多い、高さ60センチほどの多年草です。北海道、本州、九州や朝鮮半島、中国に分布しています。薄紅色の花の下に付いている長い柄に見えるものは子房(しぼう)で、のちに実になる部分です。実の長さは5センチほどで、熟すと4片に裂け、毛のついた種子が飛散します。写真がないのが残念です。

アカバナ　9月中旬　さくらの杜公園東隣接地

チョウジタデは水田の中に多い高さ60センチほどの1年草で、北海道から九州までの日本列島のほか、東アジア、東南アジアに分布しています。名前はチョウジタデですが、タデの仲間ではありません。黄色い花の下に付いている長い柄のように見えるのは、アカバナの場合と同様に子房(しぼう)で、のちに実になります。チョウジタデは、秋になると植物全体が赤く色づきます。チョウジタデの根はゴボウに似ていることから、チョウジタデの別名をタゴボウといいます。

チョウジタデ（花期）9月中旬　市之台地区

赤くなったチョウジタデ　10月下旬
市之台地区

ヒレタゴボウは熱帯アメリカ原産の帰化植物です。1955年頃四国に帰化し、以後関東から九州まで見られるようになりました。1年草で、湿地に生え、水田の中にも見られます。7～8月に黄色い花を咲かせ、秋には実が赤くなります。ヒレタゴボウの葉のつけ根は長く、茎に合着（ごうちゃく）（葉の基部が完全に茎と一体化して茎の一部を構成している状態）しており、茎にひれが付いているように見えます。また、ヒレタゴボウの外観はチョウジタデに似ています。チョウジタデの別名はタゴボウなので、こちらにはヒレタゴボウという名が付いたのです。

ヒレタゴボウ　9月上旬　市之台地区

ヒレタゴボウは在来種ミズキンバイにも似ているので、別名をアメリカミズキンバイといいます。ミズキンバイは沼や池の中に生える植物ですが、みずき野周辺では見たことがありません。

6　ホソバヒメミソハギ

ホソバヒメミソハギは熱帯アメリカ原産の帰化植物で、最初は1952年に佐世保市で見つかったそうですが、その後関東地方にまで広がりました。ミソハギ科の1年草で、水田や休耕田に群生します。花は8～10月に咲きます。

ホソバヒメミソハギ　9月上旬　市之台地区

なお、在来種のミソハギも水田のへりによく見かけます。ミソハギについては、本コラムの第6回「『ハギ』と名のつく植物たち」でとりあげたので、そちらを参照してください。

7　オモダカとヘラオモダカ

オモダカは日本全土の他、東アジアからインド、西アジアまで広く分布するオモダカ科の植物です。みずき野に近い水田の中にも見られ、夏から秋まで花を咲かせています。水田雑草のひとつですが、管理の行き届いた水田にもよく生えているので、かなり防除の難しい植物なのでしょう。

オモダカ　7月下旬　本町地区

葉はやじり形で、葉の形によって他のオモダカの仲間と容易に識別できます。オモダカは茎に次々と花を付けますが、花には雌花と雄花があります。茎の下方に咲くのが雌花で、上方に咲くのが雄花です。

オモダカは「沢瀉」または「面高」と書きます。沢瀉(おもだか)は漢語「タクシャ」を当てたものですが、中国では沢瀉(おもだか)はオモダカの仲間、サジオモダカを指すとされ、サジオモダカの根茎の生薬名でもあります。面高(おもだか)は長い茎の先端に付く葉の形を人の顔になぞらえた名といわれてい

ます。オモダカの葉はその珍しい形によってよく家紋として使われています(「WEB 家紋帳 ―沢瀉(おもだか)」)。

クワイ(慈姑)はオモダカを大きくしたような植物で、オモダカの変種です。葉や花の形はオモダカとほとんど同じです。クワイの原産地は中国で、日本には栽培植物として渡来したとされています。いつ頃日本で栽培されるようになったのかについて、植物学者の北村四郎は次のように説明しています。

> クワイは日本で栽培されるが、普通、野生種はない。中国から伝来した植物とされているが、いつごろきたのだろうか・・・・。牧野富太郎博士は「よくわからぬが、仏教が日本に伝来したころ」と想像した。しかし、江戸時代の初めからはあったようだが、奈良・平安時代にあった確かな証はない(『北村四郎選集1』 保育社)

食用になるのは地下茎の先端にできる塊茎(かいけい)(ジャガイモやサトイモのように、地下茎の一部が肥大してかたまり状になり、でんぷんなど貯蔵物質を蓄えているもの)です。新芽の出ている塊茎(かいけい)は、めでたい食べ物としておせち料理に使います。クワイの主な生産地は広島県と埼玉県で、茨城県でも栽培されているようです。守谷市で栽培されているかどうかは知りません。

クワイの栽培については JA 岡山西のホームページにたいへんわかりやすい説明が出ていますので、リンクしておきましょう。「JA 岡山南　営農事業－クワイの作り方」

ヘラオモダカは日本全土と東アジアに分布するオモダカ科の植物です。日本ではやはり厄介な水田雑草ですが、みずき野周辺ではあまり見かけません、下の写真は本町地区の湿地

ヘラオモダカの花
7月下旬　本町地区

ヘラオモダカの葉　7月下旬　本町地区

で見つけたものです。葉はへら状ですが、先端は尖っています。花は雌しべと雄しべをもつ両性花です。

8　コナギ

コナギは北海道を除く日本全土と、東アジアおよび東南アジアに分布するミズアオイ科の植物です。オモダカと同様、水田の中に生え、かつては水田の厄介な雑草でしたが、近頃は少なくなりました。葉はハート型や卵型、細いもの、幅広いものなど、変異に富んでおり、花はきれいな青紫色です。

みずき野近くの水田にもたまに見かけることもあり、写真にも撮りましたが、立沢地区で撮ったものの方が、花がきれいなので、そちらの写真を載せておきます。

コナギ　10月中旬　立沢地区

コナギは古くから知られた植物で、栽培して葉を野菜として食べたようです。

万葉集からの一首

大伴宿禰駿河麻呂(おほともの すくね するがまろ)、同じ坂上家(さかのうへのいへ)の二嬢(おといらつめ)を娉(つまど)ふ歌一首

春霞　春日の里の　植小葱(うえこなぎ)　苗(なへ)なりといひし　枝(え)はさしにけむ

大伴宿禰駿河麻呂(おほともの すくね するがまろ)　万葉集（407）

（コナギを比喩に使った求愛の歌。春霞は春日の枕詞。「春日の里に植えたコナギはまだ苗だと言っていたが、もう枝が伸びて成長しただろう」）

大伴駿河麻呂(おおともの するがまろ)は大伴家持の「またいとこ」にあたります。家持は、二嬢(おといらつめ)の姉、大嬢(おおいらつめ)に求愛の歌を送っていますが、恋愛の相手がかち合わなくてよかったですね。二嬢(おといらつめ)はコナギに例えられていますが、コナギの花のように可憐な少女だったのでしょうか。